

日本人配偶者を持つある在日外国人女性の文化的価値観

—TAEを用いた質的研究—

白田 千晶

1. はじめに

地球規模の急速な人の大移動によって、世界各国において異なる言語文化背景を持つ人との接触が増えている。日本でもビジネスや留学等の目的で来日する外国人の増加とともに、長期にわたる赴任、また、配偶者として日本社会に参入するといった「定住化」の傾向が強まっている。2011年に発生した東日本大震災後減少はあったものの、定住外国人は日本で生活を続けている者が多い。増え続ける永住者、定住者の中には日本人配偶者として来日している者も多く、グローバル化の流れの中で「国際結婚」は大きな比重を占めており、社会的にもたらず影響も大きいと思われる。鈴木（2007）によると、国際結婚の割合は、1965年には0.4%だったものが1980年代に入ると1%を超えるようになり、現在では15組に1組の夫婦が国際結婚だといわれているという。国際結婚は日本社会の中に定着しつつあり、このような中で、外国人配偶者を対象とする研究も増えてきている。

2. 背景

2.1 先行研究

伊藤（2007）は、日本人と結婚した在日外国人女性が、日本社会の中でどのような社会的ネットワークを築き、自分の情緒を安定させ、自己実現しているのかをアンケート調査とインタビュー調査を併用して、日本での生活全般に関わる問題について量的・質的の両方から調査、分析を行った。その結果、滞日年数が長くなるほど社会での疎外感を感じるようになることが分かり、その理由に日本語力と学習形態を挙げている。また、アジア出身の方が欧米出身者より日本に対して否定的な感情を抱いているが、差別はそれほど感じておらず、欧米出身の方がアジア出身者よりも差別されていると感じている、という結果が見られた。これらの原因として、欧米出身者は職場や家庭、日常生活で母語である英語を生かしていることに対して、アジア出身の配偶者を持つ家庭では、使用言語のほとんどが日本語であり家の中で母文化を表現することができないことが日本への否定的なイメージ形成に帰結していることが示されている。

日本人配偶者を持つアジア人女性の異文化適応を扱った研究としては、桑山（1992,1995,1997）がある。桑山（1997）は、山形県に嫁いだフィリピン人妻たちに対して数年に渡って、フィールド調査を行ない、彼女たちの受けているストレスを調査した。彼女たちが受けるストレスの中で、もっとも大きなストレスとして日本人家族との人間関係、特に姑の関係が挙げられている。都市部に住むアジア人女性の実態に迫った研究に、劉（2006）がある。劉は、これまでの国際結婚研究が農村の花嫁に焦点が向けられ、

都市部の花嫁の実態が分からないことを指摘し、都市部の日本人配偶者を持つアジア人女性を対象にアンケート調査とインタビュー調査を実施し、彼女たちの日本社会への適応・変容の過程と受けるストレスを調べた。その結果農村部では夫の両親との同居を前提とした結婚が多く、両親の理解もあり、家族や周囲の人々との関係も深い一方で、都市部の女性は恋愛結婚が多く夫に対する期待も多いが、実際に来日すると夫や夫の両親との関係の満足度は低く、個人主義の都心では近所との関係も農村に比べ希薄なことが妻のストレスの原因であることが分かった。

これまでの研究でなされてきたことは、実態を調査することあるいは、異文化に参入した際に起こった問題に対しどのように反応し行動するのか、そしてどのように日本社会に適応していくのか、その適応の過程や抱える問題について言及することであった。しかし、これらの研究は配偶者の抱えている「問題」に焦点が絞られているため、個人の生き方や価値観などが捉えにくい。「日本人配偶者を持つアジア人女性」に関する研究は数多くなされているが、その多くは実態調査にとどまったものが多い。また適応の過程やストレスをみた研究でも、結婚のスタイルや結婚後の女性の生活環境においては、多様性に欠け、日本に同化していくアジア人女性として画一的に描かれる傾向にある。このような傾向は、主体性が明確に浮き彫りにされにくく「かわいそうなアジア人妻」といったステレオタイプ的な見方を生み出す可能性がある。

2.2 研究動機

筆者は、関東のある地方都市に在住しているが、周囲には多くの日本人配偶者を持つ外国人女性が住んでいる。彼女たちは、職業や出身も様々で外国語教師や百貨店の店長、自営でビジネスを行っている家庭もあれば、主婦もいる。彼女たちを見てみると、異文化の中で様々な苦勞を感じながらも、前向きに力強く生きていく印象を受ける。特に、今回インタビューに応じてくれたYさんは、これまで研究されてきている「アジア人妻」とは違った特徴を持つように感じ、彼女のインタビューを通じて価値観を探ってみたいと考えた。

Yさんは分析者の家族の友人であり、日常的に話しをする機会がある身近な存在であるため今回のインタビューも快く引き受けてもらうことができた。Yさんは、筆者から見ると生きるエネルギーに満ちあふれたとても活発な女性である。また、Yさんの知人から話を聞くと、Yさんは物事をポジティブに捉え前向きに生きる姿が印象的であるという。

2.3 本研究の目的

本研究では、日本社会の中で周囲と関係を築き、一定の社会的役割を果たしていると自ら感じている外国人女性Yさんの生き方や価値観に焦点を当てた。

ここでは国際結婚を「異文化適応」や「適応の過程」として捉えるのではなく、個人が持つ文化的価値観の創造的な再構築の過程として捉えなおす。また、個人の価値観は、既存の文化的価値観に経験を通して新たな価値観や視点が加わり、再構築されていく動的なものとして捉えていくこととする。本研究ではYさんが、異文化経験をを通してどのように文化的価値観を再構築するのか、その動的構造を可視化する。また彼女を取り巻く環境における社会的な課題についても言及していきたい。

3. 研究課題

日本人配偶者のYさんはどのような文化的価値観を持ち、それを再構築しているのか。その動的構造を明らかにする。

4. 分析方法

4.1 調査方法

まず、半構造化インタビューを約1時間半×2回行った。内容は、国際結婚、家庭、仕事に関する事柄を中心にリラックスした雰囲気の中で自由に語ってもらった。質問事項は内容に合わせて変更した。

4.2 対象者のプロフィール

国際結婚によって来日した女性Yさん(40代)

台湾出身、母語は台湾語、家庭内言語は日本語、帰化あり、現在は総菜屋の店長ⁱをしている。

Yさんは20年前に結婚のため来日。転勤の多い鉄道職員の日本人の夫を持つ。夫は、単身赴任で家に戻るのとお正月のみである。そのような生活の中で、2人の子どもの1人で育ててきた。生きがいは仕事である。スタッフの多くは留学生で、彼らには「自分の国を背負っているから、国に恥をかかせないように」と教育している。本が好きで、日本語に限らず日本のマナーや習慣を本によって文化を学んでいるという。日本社会は閉鎖的で希薄な人間関係であることを残念に思っており、将来はお年寄りの孤独死をなくすために日本に施設を作り、一緒に楽しく過ごしたいという。

4.3 分析手法

分析はアメリカの哲学者ユージン・T・ジェンドリン (Gendlin) が開発した理論構築法であるTAE (Thinking At the Edge)を用いる。TAEはデータ解釈者がデータの意味に感覚的に密着しながら、緊密感を保持しつつ解釈することにより、既存理論の当てはめや解釈者の思い込みによる解釈をできるだけ排除しようとする方法でありⁱⁱ、近年は得丸他 (2008) によって、質的研究への応用がなされている。TAEは細かく手順化されているので初心者でも行いやすく、解釈のプロセスを示すことが可能なためインタビューの分析にこの方法を採用した。

TAEは14ステップあり、3つのパートに分かれている。パート1は、データを深く読み込み、まだ漠然としているデータ理解を感覚的に捉えて言葉にしていく過程である。

パート2は、データの中から重要だと思われるエピソード (事例と呼ぶ) を取り出し、類似性を持つものを集め、グループ化する過程である。グループ化されたものは、それぞれ特徴を表す一文で見出し (パターンと呼ぶ) をつけていく。

パート3はパート2でグループ化したパターンを構造化させていく過程である。この過程ではデータ理解を理論化し概念を用いた説明が可能となるⁱⁱⁱ。本研究では、3つのパートに分けて分析過程を示していく。

4.4 分析過程

パート1

文字化データを何度も読み、データの意味することをよく感じるように努めた。このときに、データに感覚的に密着するようになった。意味が感じられるようになった後、それを表現するために浮かんでくる言葉を書き留めた。「生き続ける」「自然」「バランス」「強さ」「一番上」「鏡」「切り替え」「入れ替え」の8つである。

その後もデータに密着し、先ほどの8つの語句とデータをさらに照らし合わせて、一文で表現した。その文が「自分らしく生き続ける感じ」である。これは、Yさんが「自分のスタイル、考え方を変えないよ

うに生活し続ける」といった意味である。

パート 2

次に文字化データ全体を見直して、エピソード（実例）を取り出したところ全部で17の実例が得られた。その後、データをさらに深く読み込み、それぞれの実例と類似しているエピソード、すなわち共通性を持つエピソード（側面）を集めてグループ化した。グループ化したものには、その特徴を表現する一文（パターンと呼ぶ）を見出しとしてつけていった（a参照）。抽出されたパターンは以下（b参照）の通りである。

a. パターンの一部

パターン1	勉強は生きるための自己投資である
実例（側面）	N：自分いろいろ勉強して…本を読んで。 I：仕事も忙しいのにすごいですね N：えー、とんでもないですよ。やっぱりね、日本に暮らしてるから、よい暮らしのためにそれがいいと思いますね。：そうすると文化もね、日本の文化とかは、お互いに誤解されないようにね、よい生活のためにね、自分の老後のためにもそれで見てもらえるようにしないと（笑）
他の実例（側面）	N：日本語教えたいの。私もヨガ、自分も習っているの、日本の文化とか、向こうの人に教えようかな。（うれしそうに笑う） I：資格も取ったんですか。 N：調理師勉強の資格とあと、アドバイザー、食品アドバイザー N：最初パートさんとして働いているとき、ことばそんなに使わなくてもすむけど。S店に入って最初から副店長になって、それで、日本語はだめだと思って日本語をいろいろ勉強して、で、どんどん勉強していくうちに自分の日本語全然だめだ。 N：で、そのあとに食品生活のアドバイザー勉強するとき、えーこれちょっと難しいねと思って、で、本社に会議で行って、みんな丁寧語使っているのに私はできません、みたいな。で、今ね、去年も一回日本語一級の試験受けた。あの、テストに受かってない。一点足りない！

パターン3	仕事は生きがいである
実例（側面）	I：Yさんにとって仕事って何ですか？えっと、生きがいとかなんかいろいろ。お金のためとか N：生きがいです。お金じゃない。生きがいです。
他の実例（側面）	N：はい。あと、あのの人に教えるの？進められて。あ、そうですね。おばあさんになったらまたこういう仕事も辛いし、なんか自分の国で、ちょっとなんかボランティアの形で教えてあげたほうがいいかなって I：あ、なんか、将来自分の国で、なんか教える仕事をできたらいいなという感じですか

b. 抽出されたパターン

1：勉強は生きるための自己投資である	10：できる外国人はすごい
2：いきなり置かれた異文化で戸惑いと迷いを感じる	11：時が物事を解決する
3：仕事は生きがいである	12：日本は建前の社会である
4：ハンディーは言葉ではなく行動でカバーする	13：子育ても仕事もバランスである
5：人一倍の努力が必要である	14：失敗は成長のステップアップになる
6：あなたの名前には国の名前が付く	15：相談しないで自分で気づく
7：何事にも理由がある	16：個人文化は大切である
8：心の入れ替えと切り替えを行う	17：自然にバランス良く生きることが大切である
9：苦労はみな同じである	

次に以下のようにそれぞれのパターンを掛け合わせて、共通性を総当たりで見えていった（c参照）。掛け合わせの際は気づいたことをメモし（d参照）、そこからさらに重要だと思われるパターンを抽出していった（掛け合わせによって抽出された新たなパターンを深化パターンと呼ぶ）。合計272の掛け合わせを行い、18つの深化パターンを抽出した（e参照）。

c. 掛け合わせの例

パターン1 勉強は生きるための自己投資である	
パターン2 いきなり置かれた異文化で戸惑いと迷いを感じる	パターン3 仕事は生きがいである
交差：パターン1×2 今になって理解できる理由	交差：パターン1×3 勉強は生きがいを見つけるきっかけ
メモ（交差1×2の経緯） 勉強することで戸惑いや迷いも消えていく。戸惑いや迷いは勉強することで解決。	メモ（交差1×3の経緯） 生きがいを持つことで自己投資ができることにつながる。

d. 掛け合わせから気付いたことの一部

<p>☆成長すること＝経験により問題を解決するいくつかの方法を見つけ、それを行使しながら一步一步試行錯誤しながら進んでいくこと。時間はかかるが、らせん状のサイクルで一步一步上に上がっていくイメージ。さまざまなトラブルによって、停滞したり、下にさがったりもするが、行動し続ける限りは常に上へと向かっていく。</p> <p>☆成長すること＝自分で自分をコントロールできて、自然体でいられるよう生活のバランスを保つこと。</p> <p>☆文化の作り変え</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分がやりやすいように、暮らしやすいように個人文化を生成し続けることでより自然に生きられる。 ・自分の生活、環境、周囲の人々に合わせて作り変えていくものであり変動的である。 ・一貫しているものがある。どこへ行っても変わらないものがその核となっている。 <p>個人文化＝これまでの経験や知識、観察などによって得られた情報など様々な要素のかたまり。生きていく中で、文化を生成して状況に合わせて対応していくサイクルを見つけていくことで生活もバランスが取れてくる。</p>

e. 深化パターン

1：勉強はバランス良く生きるための1つの方法	10：メリットデメリットで問題解決
2：生きがいは失敗がつきもの	11：問題が解決されれば自然体になれる
3：気づきと母文化の再認識	12：優先順位と行動
4：文化的戸惑いはバランス良くカバーする	13：時間がたてば解決する
5：努力する3つの方法	14：行動でカバーしてバランスを保つ
6：両国の文化の融合	15：成長は生きがいから生まれる
7：理由を知るために必要な失敗と成長	16：自分で自分をコントロールして生活のバランスを保つ
8：生き方の工夫を探す	17：気づきは自分を変える
9：苦勞すればするほど認められるものが仕事	18：文化を作り変えて自然体になる

パート3

深化パターンを見直し、重要語を3つ選出した。A「気づき」B「文化の構築」C「自然体」である。さらにこの3つの語句の関係性を探るため、AとB、BとC、CとAの2語間の関係性を探っていった。その際に重要だと感じたことをメモし、新たな気づきを箇条書きで記載した。

AとB：「気づき」と「文化の構築である」

メモ：工夫して経験の中から気づきを得ることによって、自分の中の経験知との融合が起こり新しい文化の構築が起きる。

BとC：「文化の構築である」と「自然体」

メモ：文化の構築は様々な経験から行われ、積み重なっていくものである。文化の構築が上手く進むとより自然に自分らしく生きられるようになる。

CとA：「自然体」と「気づき」

メモ：自分のスタイルは1つだけではなく、様々なストラテジーの組み合わせから成り立つ。気づきを得ることで、いろいろなストラテジーを身につけることができる。それを使い分けることでより、自分が自然体で生きられるようになる。

2 語間の関係を探った際に得られた気づき

- ・いくつかのストラテジーを使って新しい気づきを得ると自分の中で新たな文化構築が起こる。文化の構築は経験や知識によって行われ、時には作りかえられていく。文化構築は自分はその環境で生きやすいように作られ、より自然でバランスが取れた生活を送るためには必要だと考えられる。文化の構築は日常的に行われている。
- ・気づきにはパターンがある（観察、本などによる情報、外国人の自覚、心の切り替え）。これらのパターンをうまく使って気づきを得て、納得する。⇒既存の文化と新しい気づきの融合→新たな文化の生成
- ・新しい文化は生活や環境に応じて変化する→システム的である。それによって自然でバランスが取れた生活が送れるかどうかが決まる。
- ・キーワード「文化の作り変え」「システム化」「バランス」「経験値の積み上げ」「文化の融合」「環境」

ここまでの過程と抽出されたキーワードを見直し、重要語（タームと呼ぶ）を選び直し、気づきの全体を振り返り、まとめ直し全体を表現した。タームは「成長」「生き方の工夫」「バランスを保つ」「前進」「文化の生成」「環境」「外国人としての自分」であった。タームを相互に関連付けると、次のように説明された。□で示したものがタームである。

Yさんは【外国人としての自分】、その状況を生きるエネルギーに変えている。異文化環境の中で、様々なストラテジーを使って自分の【生き方の工夫】を見つけ、生活の【バランスを保とう】としている。【バランスが保たれる】ことはYさん自身が自然体でいられることである。彼女が【成長】するための【生き方の工夫】は、Yさんの経験や本などの情報から得た知識の融合によって生み出されている。これはYさんの中で新しい【文化の生成】が起きていることであり、【前進】していることである。Yさんは異文化【環境】でなるべく自分のスタイルを変えずに生きようとしている。一方で、その【環境】の中で自分自身が納得することの難しさも感じている。Yさんが納得することは嫌なことや理解できないことを割り切って忘れることであり、そうやって苦しみを乗り切っている。

5. Yさんの文化的価値観の構造

TAEの分析の結果、Yさんの文化的価値観の構造は「自分のスタンス・スタイル」「経験」「知識・情報」がピラミッドのような軸となり生き方のバランスを保っている。「自分のスタンス・スタイル」はYさんの本来の性格やスタンスであり、生き方の土台となっており、その上に異文化の経験、新しく得た知識や

情報が積み上がりバランスを保っている。以下、Yさんの文化的価値観の構造を3つに分けて説明していく。(構造図1)

文化的価値観の構造① 文化を融合させ新しい文化を生成する

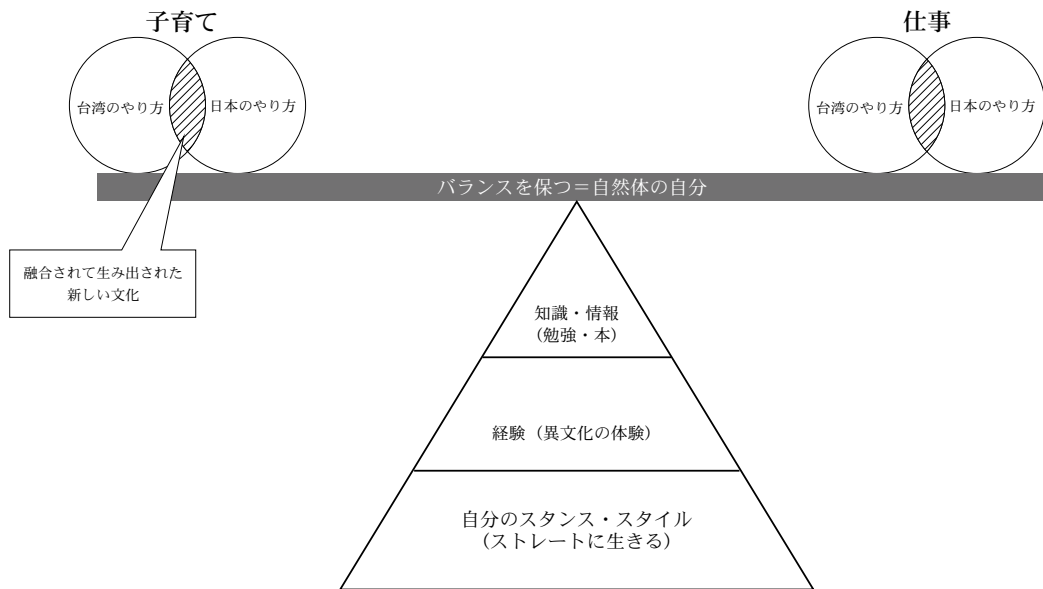
Yさん自身が持っている既存の文化や価値観は異文化の体験をすることで新たな気づきを得て、融合され、新しい文化や価値観が生成されている。Yさんの気づきを得るための戦略には「観察する」「本などの情報を得る」「日本人でないことを自覚する」「放っておく」の4つの種類があることが分かった。戦略は、Yさんのバランスを保っている軸の部分「知識・情報」「経験」「自分のスタンス・スタイル」のそれぞれの部分で行使されている。以下、Yさんの気づきの戦略について説明する。

【観察することによる気づき】

Yさんは、自分が仕事などで辛いことがあった場合には、誰にも相談せずに他の評価が高い店をじっくりと観察し、なぜそうなったのかを自分の中で納得するようにしている。その場合は日本人をじっくり観察するという。日本人をじっくり観察し、日本人以上の働きをすることで、外国人として感じる辛いことや苦しいことをブレイクスルーして自信を得ている。また、観察すると自分たちが「外国人だから」という間違っただけの思い込みをしていることに気がつくという。これは、ピラミッドの一番上の「知識・情報」の部分に対応している。

Y：まあ、辛い時あっても私誰にもいわないの。うーん、相談しても意味ないと思う。そうなったら、私落ち込むのときね、だいたいね。うん、同じ職業？働いている人の姿見て、他の人見て、なるべく日本人にします。で、その人を見る、そこ座って、じーっと、見てって。で、そうすると大体が見えてきます。

Y：見て、日本人じゃないと「私日本人じゃないからそういうふうと言われる」ってありますよね。



構造図 1

勝手にその観念ある（ことが分かる）。そうそう思い込みがあって、そうするとそんなことないよーって、みんな同じですよって。（インタビューより）

【本などの情報を得ることによる気づき】

納得がいけないことがあっても、あとから本を読んで納得することが多く、本の知識で助けられていることが多いという。特に日本における建前の問題や従業員との間のコミュニケーションの問題は自分の国のやり方とは違うということを通じて知り納得している。はじめは納得できなくてもそのうちにだんだんと慣れてうまくやれるようになるというのがYさんの考えである。これは、ピラミッドの一番上の「知識・情報」の部分に対応している。

Y：本はかなり役に立ちます。人間とコミュニケーションがとても大事なので、で、自分は台湾のままの生活をすると、まあ日本の女性はとても優しいので目の前、あ、言わないかもしれないけど、でも自分は相手に傷ついちゃった（傷つけちゃった）。私も今ね、なんでこの人にこんな態度とった…やっと分かった。傷ついちゃった、悪かったって。そういう本読んで勉強した知識って役に立っています。

Y：最初日本人はなんでそんなに建前ばかりで、表面だけ形に。でやっぱ本読んでるうちに建前は人をだますとかじゃなくて、暖かくね、いろいろね、失礼ないようにとか、そういうののためにありますよーって。（インタビューより）

【日本人でないことを自覚することによる気づき】

Yさんによると外国人は日本では他の人の3倍努力する必要があるという。人よりも努力してどんな大変な仕事でもやる、自国の人間としての意識を持って働くことで自分の母国に恥をかかせることなくこれから日本に住む人も生活しやすくなる。常に自分が努力し一番上に立つことを目指していると、そのうち日本人がアドバイスを求めてくるようになるそうである。それはYさんのお店のスタンスでもあり、従業員を教育する上でもそのことを自覚し仕事をするようにと伝えている。これは、ピラミッドの真ん中の部分である「経験」の部分に対応している。

Y：もし、来るんだったら日本人より三倍努力しないといけないよって。私そのときすごい気がついた。気がつくの。そう一級取ってたのね。

I：何の努力が必要ですか

Y：根性、根性。誰もやりたくない仕事自分やる。（中略）負けたくないじゃないですか。外国行って、私と同じ国の名前背負っている人たちで。

Y：わたしね、一番最初に（外国人の従業員に）はっきりいうの。自分の名前ないです。国の名前しかないです。（中略）国に恥かかせないように頑張ってねって。やっぱり、国全国にイメージ入ってしまうので、一人だけダメ、全部ダメになってしまうから、みんなでちゃんと頑張らないと…

Y：私日本人じゃないから負けないと。ずっと一番上にしてるの常に。そうすると逆に日本の方はどうやってそんなにできますかってアドバイスしてほしい。（インタビューより）

【放っておくことによる気づき】

嫌なことや考えてもどうしても納得できないことは、そのまま放置して別のことに打ち込むというスタンスを取っている。そうするとそのうち嫌なことは忘れてしまったり、時間が経つと自分も変わってくるので自然に解決されるという。無理に変えようとしてストレスを貯めるのではなく、時間を置くことで環境や自分自身が変化するのを待つのである。

以上よりYさんは気づきのストラテジーを駆使して、Yさんがこれまで築いてきた文化と新たな気づきが融合し、新たな価値観や考え方を生成しているのである。すなわち、異文化での生活の中で経験する様々な問題をクリアしていくことで、経験知が積み重なりYさんの新たな文化的価値観の生成を促しているのである。これは、ピラミッドの土台の部分である「自分のスタイル・スタンス」の部分に対応している。

Y：えっと、そうですね。どちらのほうが。私ね、だいたいね、忘れるの。あんまり深い中に入れない。他のこと入れてで、すぐに忘れる。そうそう、他にこと急にするの。そうすると、だいたいやなことある程度忘れてしまうの。

Y：自分、無理やりするとストレスたまってしまうよね。だから、自分として合わないのあったらとりあえず触れないようにして、で、時間がたてば変わる。自分もそれなりに生活してきましたので変わってきます。そういう経験多いです。(インタビューより)

文化的価値観の構造② バランスを保つ

Yさん文化的価値観の構造は生活や環境に応じて形を変えながら対応している。自分と子どもの将来を考えて帰化したがる、そのことに対しては帰化する際は悩んだが、子どものためには必要なことだったと話している。子どもの教育を大切にすると仕事もうまくいく。子どもをしっかりと見てあげてそして仕事をするので、どちらも笑顔で幸せでいられるという。

Y：帰化しないとやっぱり老後になったら、子ども、迷惑かけていけない。あの、日本の国籍なると、老人保険とかそういうものも…そのほうが子どもに迷惑かけないほうがいいんじゃないかなと思って。(中略)

最初やっぱり自分の国の方が、ね、国籍残りたい。でも、いろいろと、例えば学校はいるとき、推薦とかあるじゃないですか、そういうとき子どもに影響したらと思って帰化した。

Y：仕事は大事だけど、子どもは一生ものだからそれ大事にしたほうがいいですね。子供大事に育てれば、仕事絶対うまくいきます。(中略) 仕事中心になると家の家庭は、なんていうかな、お父さん単身赴任で、いつも家いないですね。はい。もし私仕事ばかり中心になると、子どものほうは見えなくなる。見えなくなると、私が、忙しいのときは分かりません。でも帰ってきたら子どもの顔見れば分かります。あーね、でなったら逆にちょっと本当に少しだけでも気にすれば、子どもも笑顔で、帰りもお母さん待ってて。で、こちらも安心で、子どもに悪いこと、悪いことって言うか、なんかそういう感じで仕事も安心してできる。子どもが幸せじゃなければ、自分も幸せなれません。(インタビューより)

外国人スタッフが多い彼女のお店のスタッフ教育も、家庭での子どもの教育も、個人の文化やスタイルを大切にすることが重要だという。ただ、その国でうまくやっていくためのヒントを伝えてあげること、みんなが過ごしやすくなるとYさんはいう。家庭の教育においては、「自分の国ではこうだった。日本で

教育を受けていないので日本のことはわからない。日本のこと教えて欲しい」と子供たちに聞きながら、日本と台湾の文化を同じように身近に感じていくことが異文化における教育のポイントである。どちらが正しい、正しくないではなく、ただ事実を伝えていくのである。

Y：仕事でいろんな国の人きてた。その国はその国の文化あります。その国はその国の文化の習慣性。例えば私、モンゴルの人と一緒に働いた、朝青龍？の行動は分かりました。最初はなんでそんなことなるのって。でも一緒に仕事した、その国そういう文化ってわかります。批判するのではなく、その個人の文化とかスタイルを大事にしていくのが必要。無理やりなおすは必要ない。いいところをとってあげて、あんまり合わない？日本の場合はこうしたほうがみんなもっとよくなりますよって。友達になれますよって。(中略)例えば子どもに、「お母さんそれ違う、それいつも嫌」で、お母さんはっきりいうの。「お母さん日本の学校行ってない、日本のいろんなこと、文化は全然わからないの。だからお母さんに教えて」って。(逆に自分も)文化のいいのところは教える、教えるというか、例えば食べ物習慣、日本こうなるですよ、台湾だったらこうなるですよってそういうふうに話すだけ。だめとは言わない。日本だったらこういうやり方、台湾だったらこういうやりかたですよって。(インタビューより)

Yさんの生活の中で大きなウエイトを占めている仕事、育児間では異文化間の教育に対する考え方は一貫しており、自分らしい動きができていくことがうかがえる。異文化間で極端になりすぎず、自分の中の自然体で対応していくことで、母文化と異文化の融合がうまく進み新しいYさんの文化的価値観の構造が形成されていくことが分かった。Yさんにとって、文化の違いを知ることは重要であるが、人の考えや自分の考えを変えようとはせず、違いを理解していくことで双方の文化を自分の生活にうまく取り込んでいく。仕事と育児のバランスを保つためには、軸として支えている部分が必要である。構造図1より、Yさんのバランスを保つための軸には、土台に自分の譲れないスタンスがあり、そこに異文化の経験や新しい情報、知識などがピラミッド型に積み重なっている。また、バランスが取れている状態はYさんが自然体でいられる状況を作り出していることが窺える。

Y：国の文化は守らないといけなことがあるので、いいとか悪いとかではなくてそういうところは注意しないといけな。例えばね、どこの国は豚肉食べないって、無理やり食べさせると同じで、国の文化とか宗教は大事にして、自分のところも大事して。

I：バランス取るって大変じゃないですか。

Y：もう自然だよ自然。バランスですね。バランス。逆に日本にこういう考えって、そういうふうに考えると頭おかしくなりますよね。この国こういう風なんだねってそれだけ。

(インタビューより)

文化的価値観の構造③ 「外国人」を生きるエネルギーに変換する

Yさんの語りから、様々な経験や失敗から気づきを得ることでステップアップできると考えていることがうかがえる。失敗は当たり前、失敗することで様々なことを学び、納得し、成長することができる。

Y：失敗は当たり前です。失敗ない方が人生何もありません。それで失敗を恐れず、さらに次回はどうか、それにして。(中略)最初はやっぱりことばが苦勞しました…最初パートさんとして働いているとき、ことばそんなに使わなくてもすむけど。S店に入って、最初から副店長になって、

それで、日本語はだめだと思って日本語をいろいろ勉強して、でどんどん勉強していくうちに自分の日本語全然だめだ。(中略)で、今ね、去年も一回日本語一級の試験受けた。あの、テストに受かってない。一点足りない！で、来年。今も勉強。・逆にあたし、仕事に入っても自分から、私日本人じゃないから、さっきの言った通り、負けない。と、ずっと一番上にしてるの常に。自分は一番上、一番上と。作るのも一番上、何とかも全部一番上に、できるは自分は一番上にしておくんだね。そうすると逆に、日本の方(かた)は、どうやってそんなにできますかってアドバイスしてほしい…
(インタビューより)

Yさんの場合、仕事と育児が生活のほとんどを占めている。仕事においては、外国人店長として日本で仕事をしていることが、彼女のバイタリティーと生きるエネルギーとなっている。自分の日本語に関しては店長会議で指摘されたことで、それをクリアしていくことでさらに上を目指すことができる。外国人という不利な立場でも体験を前向きに捉え、上に行くチャンスだとして自分自身を高めていく。

Y：そう、私ね店長会議でたまに書くの事あります。問題みたいなの。そのときは交換にして答え合わせ。(中略)で、マネージャーに「そんな日本語ありません」って言ってたの。そのときすごい気づいた。自分もっと勉強しないと。(中略)そう、そのきっかけじゃないと自分も勉強になれないよーって。もしね、例えば、マネージャーそれを言わないで、自分だめなままじゃないですか。ずっとだめな店長さん。で、自分それをクリアして、どんどんクリアして、そして私いつかマネージャーを超えるかもしれない。
(インタビューより)

また、外国人は日本人よりも認められにくいことを実感しており、特に「外国人」と言われることに対しては傷つくという。

Y：最初に入って日本語全然自信ない。でみんなに迷惑かけたくないとか言われたくない。だから人より2倍の仕事やってる。すごい量よ。でも認めて欲しいですね。

I：日本人より認められにくい感じがしますか。

Y：ありますあります。やっぱり一番傷つくのは外国人、外国人って傷つくかもしれない。

(インタビューより)

Yさんの働いているS店が入っている百貨店でもそうだが、多くの日本の店は外国人を雇わないことが多いとYさんはいう。しかし、Yさんは外国人を雇用しない店は損しているとインタビューで強調している。それは、できる外国人は仕事が早く一生懸命働くことを自分の経験上知っているからである。

(外国人従業員の悩みを聞いて)

I：実際にそういう話(外国人のスタッフは雇わない店があるという話)聞いてどう思いますか。

Y：その店そんなよーって。外国人は出来る人間はすごいよって。自分もいろんな人使ってるから。あの一、ほんと外国人の方、はやい。
(インタビューより)

外国人スタッフに対しては、自分の経験から生活の大変な状況を知っているため、悩みを聞いたり、手

作り弁当の差し入れをしたりする。この部分からも外国人店長という立場のYさんだからこそ外国人スタッフの大変さが理解できる、あるいは理解しようとしている様子が窺える。

Y：(スタッフに対しては) 特別変かもしれないけど、まあ国から離れてね、ここ外国でバイトしながら学校いきながら、で私、お母さんみたいに、うーん、いろいろ見てあげたり悩みあれば聞いてあげて、で、たまに私も手作り料理持って行ってあげるの。(インタビューより)

頼られることは彼女が仕事をしていく上で自信につながっていると言えるだろう。違う文化の中でいかに自分が過ごしやすくするか、そのヒントをスタッフたちに伝えていくことを大切にしているが、その方法として、店のルールを教えると同時に日本社会のルールや文化についても伝えている。ルールやその社会のやり方を知ることで、みんなが仲良く楽しくすごせると考えている。

Y：(従業員の教育について) やっぱり最初は日本の文化は、あの、あと社会のルール教えないといけないな。あの、店は、日本社会は、こういうルールですよってね。仕事みんな楽しくのためにね。わたしね、うちのお姉さんに教えられた。今、もう3年前の取り出して、あのときと今のとき、また考えも違うよ。(インタビューより)

特に、仕事と家庭において報連相^報は大切だと言う。これは彼女のスタンスにとっても合っていて、うまく物事を進めるためにも大切にしていることである。

Y：(日本のスタッフ教育について) 報連相、かなり難しい。出来る人はできる、できない人はもう一生隠す。報連相、結構、本当に大事です。日本にきて、報連相、自分にぴったりな感じ。家庭でも報連相、大事が必要。(インタビューより)

彼女にとって過ごしやすい環境はとても重要である。仕事も子育てもバランスよくこなすためには、環境づくりは大切である。インタビューより、Yさんは外国人であることを強みにしてポジティブに生きている様子がうかがえる。異国の地で生きていくことは、現地の人よりも苦しいことや納得できないことがたくさんある。特に、母国で培われた価値観がひっくり返るできごとがあった場合に、葛藤が起り苦しむこともある。しかしYさんは葛藤が起こった場合に、様々な気づきのストラテジーを駆使して、新たな価値観や考え方を生成している。Yさんは、これらの出来事を成長のステップアップと前向きに捉え、様々な問題をクリアしていることが分かった。彼女が自然体でバランスよく生きていくことは、葛藤の中で努力し続けることで、周囲に認められ、さらに日本人よりも上にいきたい、というYさんの強い思いに影響していると考えられる。またこのことは、文化に関係なく自分らしく「ストレート」でいく、というYさんの生き方を貫く自信にもつながっているのではないだろうか。

Y：私(スタッフに)ははっきりいうの。「私はね、ストレートだからはっきり言うけど裏はごちゃごちゃ言わない。ただ、私の前でもはっきり言ってください。なんかその方がわかりやすいの。仕事うまくいくためにもはっきりしましょうね」って。(インタビューより)

「外国人」という立場をエネルギーに変え、仕事と育児のバランスを保ち、自分らしく生き続けるYさんは、失敗の経験は成長のステップアップと捉え新しい文化を生成し続けているのである。彼女にとって成長することは、らせんのように上に上がったり下がったりしながら少しずつ上へとステップアップしていくと捉えることができる（構造図2）。

6. まとめと考察

TAEによる分析の結果より、Yさんは様々な経験を自分自身のステップアップと捉え、そこで得た新しい気づきを既存の文化と融合させて、自分が生活しやすいように文化的価値観の構造を創造的に作り変えている構造が可視化できた。Yさんの文化的価値観の構造は、①文化を融合させ新しい文化を生成する、②バランスを保つ、③「外国人」を生きるエネルギーに変換する、の3つから成り立っている。これらは、変化可能であり新たな経験に柔軟に対応していくことが可能である。またそれはYさんが自分らしく自然体で居続けるための糧とも言える。ここでは彼女が日本で遭遇した様々な問題をどのようにクリアしてきたのか、異文化の中で生きるためのYさんの文化的価値観の特徴を述べていくこととする。

Yさんの文化的価値観の構造の中から、次のような3つの特徴を見出すことができる。

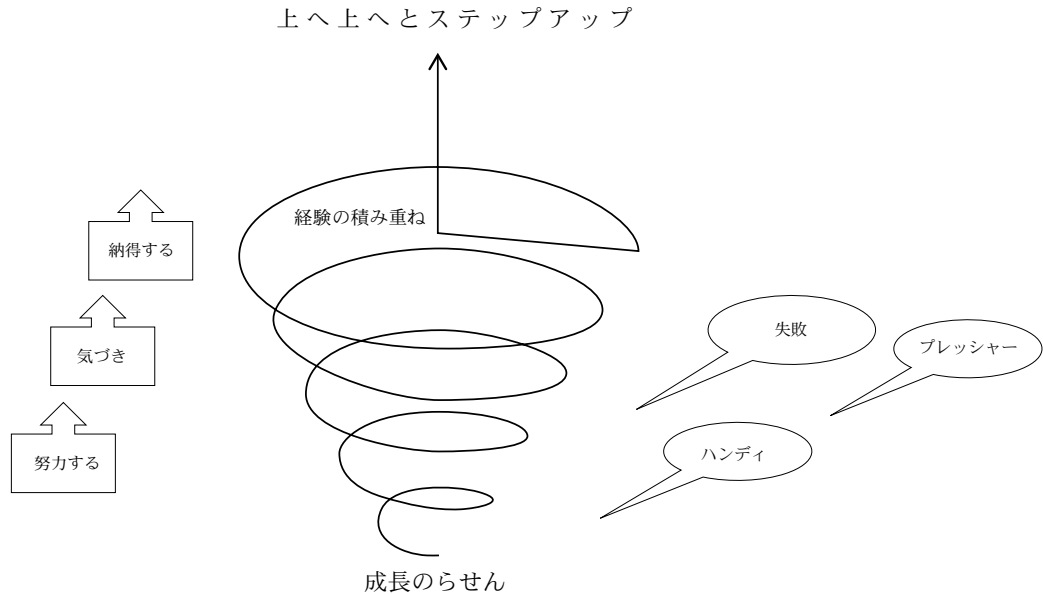
- (1) ストラテジーを行使して新しい気づきを得る
- (2) 母文化と異文化のバランスを重視し、自然体の状態を保とうとする
- (3) 様々な経験をすることで成長していることを自覚する

(1) ストラテジーを行使して新しい気づきを得る、では主に4つのストラテジーを使いながら異文化の中で新たな気づきを得ている。そして、Yさんの既存の知識や価値観に新たな気づきに加わり新しい文化を生成している。既存の知識や価値観はYさんが母国で得たものだったり、異文化経験により得たものだったりするが、そのときの環境や新たな経験に応じて作り替えられているため変動的である。Yさんは、このときに新しい文化の生成とともに、自分自身が生活しやすい状態を作り出しているのである。

(2) 母文化と異文化のバランスを重視し、自然体の状態を保とうとするでは、Yさんの生活の大きなウエイトを占めている仕事と育児の中で遭遇する異文化の壁をうまくクリアしていくことでYさんの自然体な状況が保たれている。異文化の壁をクリアしていく方法としてYさんが行っていることは、個人の文化やスタイルを大切にすることである。その国でうまくやっていくためのヒントを伝えることは大切だが、「こうしなければならない」と相手に押し付けたり、「いい、悪い」を自分で決めるのではなく、ただ経験から事実を伝えていくことが重要であるという。

(3) 様々な経験をすることで成長していることを自覚する、は成長を感じる体験としては仕事が大部分を占めていることから、社会に出ていくことで失敗や苦労を経験し、それによる多くの気づきを通して自分に自信がついてきた様子が窺える。それは、Yさんが「外国人だから、日本人とは違うから」といった特異性から生じた多くの経験がもとになっていることが分かった。異文化社会に参入すると「外国人だから、日本人とは違うから」といった感情を持つことが多くなり、このような感情は否定的なものとして捉えられることが多い。しかし、今回のYさんのインタビューを通して「外国人だからこそ得られた経験」を強みにして、前向きに生きているYさんの生き方を探ることができた。

インタビュー、分析、結果と振り返ってみると、Yさんの生き方の1つの重要なポイントが見えてくる。「社会に参入する」ことである。新しい文化や価値観は経験によって創られていくが、今自分が暮らす社会に参入し、様々な人に出会い、新しい文化を経験することにより、既存の文化や価値観の大きな再構築



構造図 2

が行われYさん自身が大きく変化していく。それはYさんが日本の社会的集団の中に併合されて同化していくのではなく、自分の持つスタイル・スタンスを土台に置きながら、そこに異文化で得た生活の知恵を上乘せし、母文化と異文化を融合させて生きているYさんの個人理論なのである。

Yさんの生き方が周囲から見てポジティブに見えるのは異文化の中で起こった様々な出来事を①文化を融合させ新しい文化を生成する、②バランスを保つ、③「外国人」を生きるエネルギーに変換する、の3つで対処し、異文化の壁を現状突破しているからである。

一方で、Yさんに見られる特徴的なものとして「言葉の壁」「外国人だから頑張らなければならない」など国籍や文化に深く根付いている発言は、多文化共生社会の実現を遠ざけてしまう恐れがあることを認識しなければならない。杉原(2010)は、相互学習型活動^vの日本語母語話者(以下NS)と非母語話者(以下NNS)の対話の中で、「日本人」と「外国人」の間に明確な境界線が引かれるカテゴリー化が行われ、「外国人」は「日本人」を中心に異質性を浮かび上がらせる形で一括りにされているため自己を保つことが十分にされていないことを問題として挙げている。また会話の中で「正しい日本語」「日本のやり方」が無意識的に優先されることによって、NSによるNNSへの力の行使を内在した非対称的な関係性になっていることを指摘している。このことは、活動内にとどまらず社会の中で起きていることであり、Yさんの周りでも日常的に起きていることだと筆者は考える。Yさんの環境作りには筆者も含め多くの人関わっていることを自覚し、無意識的に「日本人」「外国人」の境界線が引かれたり、「正しい日本語」「日本のやり方」が優先されることに対して意識改革を行っていく必要があるのではないだろうか。

生活の中でもっとも重要なことは、自分の今生きている環境が安定した状態にあるかどうかであると筆者は考える。例えば、まったく知らない第二言語におかれた時、人は言語環境が不安定になっている。言語環境が不安定になれば、能力を発揮することが難しくなり、それは子育てや仕事に影響を与える。ある出来事をきっかけに変化した環境によって、その人の生存を脅かされる危険があるのである。岡崎(2007)は、『共生日本語教育学』の中で、多文化多言語日本語教室において、母語話者(マジョリティー)と非

母語話者（マイノリティー）がともに社会を築くことに関わって生じる問題の大きさ・深刻さに圧倒され、無力感や諦念に襲われやすい、ことをもっとも根深い問題として挙げている。社会の構築は人間のネットワークによって創られていることは注目すべきことであり、社会と人間は切り離すことができないということは現在のグローバル社会の中で私たちがしっかりと自覚していかなければならない。

7. 終わりに

本研究では、Yさんの文化的価値観の構造を可視化した。Yさんは国際結婚により今までとは違った環境の中で、母国で培われた文化的な価値観を変化させながら生きている。言い換えれば自分なりの日本で生きるすべを身につけながら生活しているのである。それは「気づきのストラテジー」を行使して生活のバランスを取ったり、生きがいを手に入れることで自分の成長を確信したりすることでもある。Yさんは1つの事例であるが、彼女の生き方は今後異文化で生活するだろう多くの人々に生きるヒントを与えてくれるだろう。

今後は異文化環境が人間に与える影響についてさらに深く追求し、そこから見えてくる問題の解決のために何ができるのかを具体的に示唆していくことを課題としたい。

参考文献

- 伊藤孝恵 (2007) 「国際結婚夫婦のコミュニケーションに関する問題背景－外国人妻を中心に－」『言語文化と日本語教育』Vol.33 お茶の水女子大学日本語文化学研究会, 65-72
- 伊藤孝恵 (2005) 「国際結婚夫婦の相互理解と共生－価値観と習慣を切り口にして－」『共生時代を生きる日本語教育－言語学博士上野田鶴子先生古稀記念論集－』326-345
- 岡崎眸監修 (2007) 『共生日本語教育学－多言語多文化共生社会のために－』雄松堂出版
- 桑山紀彦 (1995) 『国際結婚とストレス－アジアからの花嫁と変容するニッポン家族』明石書籍
- 桑山紀彦 (1996) 「東南アジア地域における在留邦人のメンタルヘルス」(特集「海外在留邦人のメンタルヘルス」)『海外医療1996 SEPTEMBER No.18』<http://www.jomf.or.jp/report/kaigai/18/080.htm>
- 桑山紀彦 (1997) 『ジェンダーと多文化－マイノリティーを生きるものたち－』明石書籍
- 桑山紀彦 (1992) 「無意識からの目覚めを－山形の外国人妻たちと多民族教育への障害 (特集 多文化元主義の教育 来日者教育の未来)」『解放運動』Vol.26, No12, 31-41
- 賽漢卓娜 (2006) 「国際結婚研究における「異文化」と「同化」－アジア人妻へのまなざしをめぐって」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 教育学科』Vol.53, 75-87
- 白田千晶 (2008) 「多文化社会における日本語教育の構築－岡崎眸監修『共生日本語教育学 多言語多文化共生社会のために』」『言語文化と日本語教育』Vol.36, 36-39
- 白田千晶 (2010) 「日本人配偶者を持つある在日外国人女性の個人文化理論－質的研究としてのTAEを用いた多文化共生への取り組み－」お茶の水女子大学修士論文
- 杉原由美 (2010) 「日本語非母語話者と母語話者の相互学習型活動における「学習のあり方」の検討－「言語的共生化の過程」の視点から－(第35回 日本語文化学研究会ポスター発表要旨)」『言語文化と日本語教育』Vol.39, 142-145
- 杉原由美 (2007) 「留学生・日本人学生相互学習型活動における共生の実現をめざして－相互行為に現れる非対称性と権力作用の観点から」『リテラシーズ3』くろしお出版, 97-112
- 鈴木(清水)寿子・得丸さと子 (2008) 「作文添削活動の実践研究における添削者の学び－TAEを用いた内省的分析－」『言語文化と日本語教育』Vol.36, pp11-20

- 鈴木一代 (2007) 『国際家族における言語・文化の継承—その要因とメカニズム—』「異文化間教育26号」特集バイカルチュラル家族—複数の文化と言語が交叉するところ—, 14-25
- 鈴木一代 (2007) 『海外フィールドワークによる日系国際児の文化的アイデンティティ形成』ブレイン出版株式会社
- 得丸さと子・清水寿子 (2009) 「質的研究はボランティア教師グループに何をもたらしたか—PCAの作文添削グループのTAEによる実践研究」『日本女子体育大学紀要』39巻別刷, 59-68
- 得丸さと子 (2008) 『TAEによる文章表現ワークブッカーエッセイ, 自己PR, 小論文, 研究レポート…, 人に伝わる自分の言葉をつかむ25ステップ』図書出版
- 得丸さと子 (2010) 『ステップ式TAE質的研究入門—TAEの理論と応用』海鳴社
- 新田文輝 (1995) 「最近の日本における国際結婚—接近と交換理論を中心にした試論—」『吉備国際大学社会学部研究紀要』Vol.5-109
- 山口美香・得丸さと子 (2010) 「現代日本人の加齢にともなう主観的幸福感 TAEを応用した質的研究」The FOLIO : A Journal for Focusing and Experiential Therapy Volume 22
- 劉榮純 (2006) 「日本における国際結婚—韓国入妻のアンケート調査・分析を通して—」『プール学院大学研究紀要第46号』69-85
- 葛慧分 (2000) 「国際結婚における「共生」の課題」『金沢学院短期大学紀要「学業」』Vol.42, 59-70
- 松村明編 (2006) 『大辞林第3版』
- Eugene T. Gendlin (1997) 『Process Model』 University of Chicago, Ph. D.

注

- i Yさんが店長を務める惣菜屋を本研究ではS店とする
- ii 得丸さとこ(2010)『ステップ式質的研究法 TAEの理論と応用』参照。ジェンドリンの理論に基づき得丸が述べている。
- iii 得丸さとこ(2010)『ステップ式質的研究法 TAEの理論と応用』 p.14
- iv 企業活動を効率よく進めるための必須事項とされる用語。上司、同僚への、報告、連絡、相談の三つをまとめた語のことを指す。(松村明編(2006)『大辞林第3版』より)
- v 地域や大学の中で隣人として生活していながら人間的接触の少ないことが問題視されるマイノリティとしてのNNSとマジョリティとしてのNSが、対話をする機会を持つことによって互いに豊かな学びを得る可能性に期待して試みられている。(杉原由美(2008)「日本語母語話者と非母語話者の相互学習型活動における参加者の関係性と共生への課題：相互行為に現れる成員カテゴリー化の観点から(第35回 日本言語文化学会研究会ポスター発表要旨)」『言語文化と日本語教育』 p.57)